

# The completion and value of “Daigaku-shō” written by Rin Sowa:

Focusing on the actual condition of the collation about the lecture notes

ZHANG Yanjun

## • Background and purpose of this study

The *shōmono* works on the Chinese classic “Daigaku”, are known to be classified into ten groups. In particular, works attributed to the lecturer Kiyohara Nobukata occupy an important position, but the fact that not only Nobukata’s memorandum of lectures (*tebikae* 手控), but also the lecture notes of students’ records (*kikigaki* 聞書) remain could be considered more important. The former, “Daigaku-chōjin” (大学聴塵), is in Nobutaka’s own handwriting, and the latter have two systems being used in the present, distinguishing who is the recorder, and whether it’s told by Kiyohara Nobukata or not.

In conventional research, it has been pointed out that “Daigaku-shō” which is attributed to the hand of Rin Sōwa of the Kyoto University was a record of Nobukata’s lecture. In terms of content, it reflects the commentary of Nobukata in similar ways as a memorandum does. However, from a postscript included in the oldest manuscript of Tenbun six (1537), one of the originally burned versions of Sōwa’s system, it can be seen that this system was established through his lecture records with calibration and adjustments. Unfortunately, this point has not attracted enough attention. This study is aimed at finding out what parts of the contents can be seen as the collation of Rin Sōwa.

### • Methods and results of the study

This study compares the “Daigaku-shō” owned by the Kyoto University to the “Seikei Four Books-shō” owned by Toyo Bunko, as well as the “Daigaku-chōjin” owned by Daitōkyū Kinen Bunko, and analyses the differences between the Sōwa edition and the other two books. In particular, the contents only contained in “Daigaku-shō” are not the traditional theories based on Kiyohara Family, but could be considered as supplementary contents. We can surmise that Sōwa’s collations are included to a considerable degree because of the considerable proportion.

### • Conclusion

Results shows that the completion of “Daigaku-shō” was based on Rin Sōwa’s own lecture records but completed by absorbing other reference books in order to make up for what was omitted from his lecture notes.

## 林宗和聞書抄『大学抄』の生成とその価値

——講述聞書における校合の実態をめぐって——

張<sup>テウ</sup>  
硯<sup>ケン</sup>君

### 一、はじめに

本研究は、四書の一つである『大学』を原典とした抄物、清原宣賢講林宗和聞書抄『大学抄』を取り上げる。日本における『大学』の受容は、鎌倉時代、宋学の渡来より始まった。室町時代に入ると、宮廷における朱子学採用の影響を受けることもあり、明経博士家である清原家において、朱子の『大学章句』に基づいた『大学』の講授が行われるようになった。清原家における新注学の享受は諸先学に詳しいが、ここではとりわけ『大学』に絞って、その受容の流れを通観していきたい。

#### 【表一】清原家における『大学』受容の流れ

頼業（一一二二～一一八九） 学庸表彰説（『康富記』、『大学聴塵』）

．．．．．

良賢（？～一四三二） 後小松天皇、四書を講ずる（『康富記』）

．．．．．

業忠（一二四〇九～一四六七） 後花園天皇に四書を講ずる（『建内記』）、將軍足利義勝に『大学』を講ずる（『臥雲

日件録』…

宗賢（一四三一～一五〇三）

宣賢（一四七五～一五五〇） 皇子知仁親王に『大学』を講ずる（『実隆公記』）、大永四年『大学』を講ずる（『大学章句』奥書）、点本『大学章句』の編纂

業賢（一四九九～一五六六） 宣賢の命を受けて『大学章句』を筆写

枝賢（一五二〇～一五九〇） 正親町天皇に『大学』を講ずる（『御湯殿上日記』、『大学聴塵』奥書）…

国賢（一五四四～一六一五）

秀賢（一五五二～一五九一） 慶長十二年・同十三年『大学』を講ずる（『大学聴塵』奥書）

表に示したとおり、学問を家業とする清原家において、『大学』は家学として累代受け継がれていた。『大学』尊崇の発端は、平安末期の清原頼業に遡れるという内容の記事が諸書に散見し、頼業は朱子の『四書集注』渡来以前において、すでに大学・中庸の価値を崇信し、二書を『礼記』より抽出して表彰したというのである。また、『大学』講述の面では、史料上に見られる最初の記事は、博士兼大外記である清原良賢が後小松天皇の侍読を勤めて行った進講である。

良賢に続くのはその曾孫で、清家中興の碩儒と称される清原業忠である。業忠は、天皇家にも將軍家にも四書を講授した。その跡を継いだのは、本研究で注目している清原宣賢である。宣賢は清原家の家学の大成をなし、『大学』に関しては、天皇家の侍読となり、將軍・公家にも『大学』の講義を行ったほか、家本の校合・書写に努め、『大学』の地位を確実なものとした。

以上は清原家における『大学』講授の伝統に関する確認であったが、一方、大学抄と呼ばれる『大学』にまつわる抄物の類も存在している。そのうち、一条兼良の手になる注釈書の性質をもった『四書童子訓』を除いては、聞書抄の類別において現存最古のものは、清原宣賢の講義に関わる抄物だとされている。大学抄の各系統と宣賢に関わる抄の位置については、柳田征司「抄物目録稿（原典漢籍経史子類の部）」より引用する。

【表二】大学抄の系統の分類

- ・ 一条兼良抄四書童子訓（諸本十三本）
- ・ 清原宣賢抄大学聴塵（自筆本一本のみ）
- ・ 清原宣賢講林宗和聞書抄大学抄（諸本十本）
- ・ 清原宣賢マタハ後人講某聞書大学抄（諸本三十二本）
- ・ 抄者未詳大学抄（諸本三種各一本ずつ）
- ・ 是也抄大学章句抄（一本）
- ・ 秋瀾一鷗抄大学抄（一本）
- ・ 抄物であるかどうか未確認（一本）

八系統に分類されている大学抄のうち、傍線で示されている三つの類は、清原宣賢に関わる系統である。『大学聴塵』は、朱子『大学章句』を詳細に注釈した仮名文語抄の類であり、宣賢の『大学』理解の全貌を窺わせる注釈書である。左の「清原宣賢講林宗和聞書抄『大学抄』」は、宣賢による『大学』の講述を、聞書者の林宗和が筆録

したものである。本研究は以下、とりわけこの抄を取り上げて分析する。なお、宣賢自身あるいはその子孫の講授に関わる「清原宣賢マタハ後人講某聞書大学抄」という系統の抄も伝わっている。

ここでは、諸系統の大学抄をめぐる先行研究について確認すると、主要なものとして以下の七つが挙げられる。

- ①足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』日本古典全集刊行會、一九三二年
  - ②大江文城『本邦四書訓点並に注解の史的研究』、関書院、一九三五年
  - ③阿部隆一「大東急記念文庫藏室町時代邦人撰述漢籍注釈書類について」(『かがみ』第四号、一九六〇年)
  - ④阿部隆一「本邦中世に於ける大学中庸の講誦伝流について―学庸の古鈔本並に邦人撰述注釈書より見たる―」(『斯道文庫論集』第一輯、一九六二年)
  - ⑤柳田征司「抄物目録稿(原典漢籍經史子類の部)」(『訓点語と訓点資料』第七〇輯、一九八三年)
  - ⑥住吉朋彦『四書童子訓』の経学とその淵源」(『中世文学』第三九号、一九九四年)
  - ⑦住吉朋彦「清家の講説と『四書童子訓』」(『野鶴群芳 古代中国国文学論集』、二〇〇二年)
- まとめて言うと、従来の問題点は大凡、清原宣賢の手になる『大学聴塵』と、先行抄にあたる『四書童子訓』との継承関係に関する検証に集中していたと言える(うち、②④⑥⑦)。ところが、清原宣賢が実際に行った『大学』の講義と密接している聞書抄に関しては、先学の調査によって、その多数ある伝本の所在が明らかになったにもかかわらず、それが詳細に論じられることはないようであり、諸伝本の性格に対する再検討も行われていない。例えば、阿部氏④番の論考において、宣賢の講義に関わる大学抄の二系統を、それぞれ「清原家講説大学抄(甲)種本」と「(乙)種本」に見なされ、そこには、聞書者は確定しかねることが分かる。この問題点を解明したのは、柳田氏⑤番の調査である。以下、氏の目録(六一頁)に引用されたものを掲げる。

上村『東京帝国大学付属図書館抄本識語』同『帝国図書館抄物採訪録』に見える。それによると次の奥書がある。

右環翠先生講此書數返余侍其席聞之書二度以童子訓輯尺詳説而校合之清書終于「時」「明」を墨消し、右傍に）天文壬辰「元年」（右傍）季秋中七日 破関子

天文歲舍丁酉「六年」（右傍）臘末二十有四於番易平庄瑞林禪室完畢

引用された抄文は、阿部博士によつて「清原宣賢の講義録と推定するのが自然であろう」とされた、次下にあげる本の抄文と一致する。ここに、これらの抄の講者が清原宣賢であり、聞書者が林宗和であることが明らかになった。

上村觀光氏が明治四十三年の時点で行われた調査の中で、天文六年書写の奥書をもつ大学抄があつたのだという。後は関東大震災で焼失したとおほしいが、上村氏の記されたところの奥書によると、この系統の大学抄を清原宣賢（環翠先生）が講者で、林宗和（破関子）が聞書者であることが確定された。さらに、奥書にあるもう一つ重要な情報も見逃してはならない。林宗和がこの抄の作成過程について、「以童子訓輯尺詳説而校合之」と記したのである。即ち、天文六年書写の奥書をもつ大学抄と同系統のものは、作成する時点において、宗和自身が『四書童子訓』、『四書輯釈』、『四書詳説』を用い、自分の講義ノート（原抄）に校正・整合を行つて成立させたものだと思われるのである。

さて、前掲した阿部氏④番の論考（六一頁）において、「清原家講説大学抄（甲）種本」の性格について、「聴塵に於いては童子訓の書名すらあげてないが、本書には「童子訓」或は「訓云」として数ヶ所兼良の説を引用しておる。他に数条「詳説云」として「詳説」なる書を引拠し」といると論じられ、宣賢の講述内容には『四書童子訓』と『詳説』

が言及されたところが提示されたが、聞書抄成立の背後には、実際の作成者である林宗和の校合が関与していることを考慮すると、抄文に『童子訓』、『輯釈』と記されたのは、宗和による校合の結果として捉えることも可能であろう。さらに、宣賢の講述部分と宗和の校合部分が多層的な構造をなしている、という可能性も否定できなからう。林宗和聞書抄『大学抄』に潜まれている校合の実態は、大いに注目に値するところだと思われる。

## 二、研究の目的と方法

こうした問題意識を持ち、本研究では以下のようなことを目的とする。

研究目的に関しては、主に以下の二つである。

1. 林宗和が聞書抄を作成する際、どのように自分の講義ノート（原抄）に校合を行ったのかを検討し、その特徴及び度合いについて把握する。
  2. 抄物作成の際における校合の問題は、抄物の成立論にも関わる課題である。校合の実態への分析を通して、抄物の作成における作成者の態度や、講者への意識について検討してみる。
- 研究方法に関しては、以下のような筋立てに沿って、考察を展開していきたい。

1. 次の第三節では、『大学聴塵』との距離―講義手控への再検討―と題し、聞書抄が講義手控との関係性について考察する。従来の研究において、『大学聴塵』は清原宣賢が『大学』講義の際に使用した手控だとされることの不確実性について指摘する。

2. 第四節では、「林宗和による校合の実態」と題し、宗和が奥書に記された三つの参考注釈書がそれぞれ明記された箇所に基づき、その校合の様相を具体的に考察していく。



なお、本研究の使用資料である「林宗和聞書抄『大学抄』」には諸伝本があり、上述した柳田氏の目録より、各伝本の情報を次の表に整理して掲げる。

【表三】 清原宣賢講林宗和聞書抄大学抄（諸本十本）

- ① 東京大学図書館旧蔵「大学抄」、一卷、天文六年写、一冊（焼失か）
- ② 京都大学附属図書館清家文庫蔵「大学抄」、一卷、天文二十三年写、一冊
- ③ 東京大学文学部国語研究室蔵「大学抄」、一卷、室町末期写、一冊
- ④ 西尾市立図書館岩瀬文庫蔵「大学抄」、一卷、慶長頃写、一冊
- ⑤ 国立国会図書館蔵「大学抄」、一卷、江戸初期写、一冊
- ⑥ 慶応義塾大学三田情報センター蔵「大学抄」、一卷、江戸前期写、一冊
- ⑦ 慶応義塾大学三田情報センター蔵「大学抄」、一卷、江戸初期写、一冊
- ⑧ 筑波大学図書館蔵「大学抄」、一卷、慶安二年写、一冊
- ⑨ 穂久迩文庫蔵「大学抄」、一卷、室町末期写、一冊
- ⑩ 活字「大学鈔」、中出惇「翻刻穂久迩文庫蔵「大学鈔」

本研究において、この系統の現存本の中、最も書写年代の古い②番京都大学附属図書館清家文庫蔵「大学抄」を用いる。また③番東京大学文学部国語研究室蔵室町末期書写本を伝本照合の際に使用した<sup>①</sup>。

### 三、『大学聴塵』との距離―講義手控への再検討―

大東急記念文庫蔵清原宣賢自筆の『大学聴塵』は、従来の研究では宣賢が度々の『大学』講義の際に用いられた講義手控だとされてきた。従って、当然ながら、林宗和聞書抄『大学抄』を『大学聴塵』に基づいた講義の聞書抄だと考えられてきた。しかし、実際に具体的な対照作業を行うと、この二抄の間には、かなりの距離が存在していることに気づかされる。以下、三つの具体例を取り上げて検証していきたい。

引用のほうでは（以下同様）、最初に「イ」として林宗和聞書抄『大学抄』の本文を掲げる。次に、聞書抄と関連するところの「ロ」『大学聴塵』の抄文を挙げる。なお参照のため、『大学聴塵』に影響を与えたとされる一条兼良撰『四書童子訓』の本文を「ハ」に示す。

【例証二】「欲誠其意者先致其知。致知、在格物」に対する注解

#### イ、林宗和聞書抄『大学抄』十七ウゝ十八オ

1 致知トハ、ヲ<sup>チ</sup>尽<sup>ス</sup>ソ、2 格物ト云ハ辟ハ何ノ謂レニ由テ天ハ高く地ハ卑イソト云ヲ究メ知ソ、3 我心ニアルカ知、万物ニアルカ物<sup>モノ</sup>ソ、4 家ハ大夫、国ハ諸侯、天下ハ天子ソ、身ヲ脩ト云ヨリ以下ハ、天子ヨリ万民ニ及マテソ、5 致知格物ハ宋ノ儒者ハ参<sup>サン</sup>シテ知タト云ソ、

#### ロ、清原宣賢『大学聴塵』三十オ

1 致知トハ、吾心ニ知ホトノ、智恵ヲ盡也。致知―格物トハ、天下ノ、万事万物ノ上ニアル所ノ道理ヲ盡也。一物ノ理ヲ盡セハ、其理ホトノ、智恵カ生也。故致知格物ハ、二ニシテ、然モ一也。物ノ理ヲ知カ、則吾心ニハ、致ニテアル也。物ヲ致ス外ニ、別ニ知ヲ致スト云、道理ハナキ也。2 物ヲ至スト云ハ、喻ハ、天ハ高く、地ハ卑キモノ也。何故ニ、天ハ高く、地ハ卑キト云、道理ヲ知り、君ニハ、何タレハ、忠ヲ至セト云、父ニハ、何

タレハ、孝ヲ至セト云ソト、極シテ知也。<sup>ス</sup>凡テ、人倫日用ノ道ヨリ、鳥獸草木ニ至マテ、各自然ニオイキタレハ、天理ヲ極知ヲ、格物トハ、云也。3物ニ在テハ理ト云、心ニ在テハ、知ト云。故格物、則致知ト成也。

ハ・一条兼良『四書童子訓』六オゝ六ウ

致知トハ、吾心ニシルホトノ、智慧ヲツクス也。格物ト云ハ、天下ノ、万事万物ノ上ニアルトコロノ道理ヲツクス也。一物ノ理ヲツクセハ、其理ホトノ、智慧カ生也。故ニ致知、格物ハニニシテ、シカモノナリ。物ノ理ヲ知カ則吾心ニハ、イタスニテアル也。物ヲイタス外ニ、別ニ知ヲイタスト云道理ハナキ也。物ヲイタスト云ハ、タトヘハ、天ハ高く、地ハ卑キ者也。何ユヘニ、天ハタカク、何ユヘニ地ハ卑キト云道理ヲシリ、君ニハ、何タレハ、忠ヲ至セト云、父ニハ、何タレハ、孝ヲ至セト云ソト、極シテ知也。<sup>ス</sup>凡テ、人倫日用ノ道ヨリ、鳥獸草木ニ至マテ、各自然ニオイキタレハ、天理ヲ極知ヲ、格物トハ、云也。物ニ在テハ理ト云、心ニ在テハ、知ト云。故格物、則致知ト成也。

これは、朱子の『大学章句』経文の一節に対する注解である。ここでは、傍線部の「知致、在格物」の解釈に注目したい。まず、「イ」聞書抄のほうでは、抄文を数字1から5までの五つの部分に分けてみた。それぞれの内容を「ロ」『大学聴塵』に照合すると、傍線並びに同じ数字で表記している部分は、聞書抄と『大学聴塵』との対応が認められる部分である。これによって明らかになったのは、五つのうち、二抄が対応できるのは1・2・3の三部分に限られており、4・5は『大学聴塵』に確認できない講述の内容となっている。一方では、『大学聴塵』が『四書童子訓』とほぼ同文であることは明白であり、宣賢は兼良の『四書童子訓』の学説を襲用していることは間違いない。このように、聞書抄を『大学聴塵』と対照し、並びに『四書童子訓』を参照にした結果、宣賢が『大学聴塵』の編纂に際して崇信した兼良の学説は、一方では聞書抄にはそれを欠け、両者に反映された宣賢の学問態度に矛盾があ

ると言わざるを得ない。

【例証二】「固小学之支流餘裔」に対する注解

イ. 林宗和聞書抄『大学抄』十才

1 支ハ枝ト同、支流ト云ハエタナカレソ、餘裔ト云ハ衣ノスソ也、裔ハ衣裾也トシタソ、2 小学ノ枝ナカレ衣ノスソ程ノコトソ、3 四方ノハテヲ四裔ト云程ニ、末ノ物ト云心ソ、4 支流ヲ集尺等ニハ二見タソ、5 大全ニハ四ニミタソ、支ハ枝、流ハ水ノナカレ、余ハ食ノ餘ワケソ、裔ハ衣ノスソ也、

ロ. 清原宣賢『大学聴塵』十七才

1 支流トハ、枝川也。大河ノ、ソハヨリ、別ニ水ノ分レテ流レヲ云。餘裔ハ、衣ノスソ也。裔ハ、衣裾也。5 大全ニハ、支流餘裔ヲ四ニ見タリ。支ハ枝、流ハ水流、餘ハ食餘、裔ハ衣ノスソト云。常ニハ、二ニミル也。

ハ. 一条兼良『四書童子訓』二十四ウ

支流餘裔ト云ハ、小学ノ書ノ二ニト云心ナリ。小学ノ書ハ多シ。ソノ中ノヒトツ二ナト、イフ心ナリ。支流トハ、エタ川ナリ。大ナル河ノソハヨリ別ニ水ノワカレテナカル、ヲ云。餘裔ハ、衣ノスソヲ云也。裔ハ衣裾ナリ。明らかなとおり、五つに分けられた「イ」聞書抄の抄文の中、「ロ」『大学聴塵』と対応できるのは1・5の二箇所であり、残りの2・3・4は、聞書抄における「独自の抄文」として考えられる。このような「独自の抄文」の存在は、次の例にも見受けられる。

【例証三】「宋徳、隆盛治教、休明。」に対する注解

イ. 林宗和聞書抄『大学抄』十二ウ

1 隆盛ハ君ノ徳ノタカウサカンナヲ云ソ、治教ハ政道ソ、休明ハ美明也、治ハ休教ハ明ノ方ソ、治ハ君ニカケ、

教ハ師ノ方ソ、2 超<sup>テラフ</sup>普カ半部侖吾ナントソ、明人ノ出タル当代チヤ程ニ誉タソ、隆盛ハ前ノ三代ニカケテ書タソ、目出度トキハ平賢カ出イテ叶ヌ物ソ、

口・清原宣賢『大学聴塵』二十一才

1 隆盛トハ、君ノ徳ノ、高ク盛ナルヲ云。治教ハ、政道也。休明ハ、美ニナル也。休ノ字ハ、治ノ字ニカケ、明ノ字ハ、教ヘカケテ見ヘシ。

ハ・一条兼良『四書童子訓』二十八ウ

隆盛トハ、君ノ徳ノタカクサカリナルヲ云。治教ハ政道ナリ。休明ハ、美ニ明ナル也。凡人材ノ盛ナリシコトハ宋ノ世也。

ここに引用した抄文において、「イ」聞書抄を1と2の二部分に分けてあるが、明らかなとおり、1の内容は「ロ」『大学聴塵』と一致しているのに対し、2の内容はやはり聞書抄の「独自の抄文」だと言える。

ここで一旦まとめると、林宗和聞書抄『大学抄』を元来手控だとされる『大学聴塵』と対照した結果、二抄の間に比較的明瞭な差異が見られるのである。それは、従来の説において、聞書抄は『大学聴塵』の内容を簡略化した形の講述内容と認めるべきどころか、『大学聴塵』よりも数多くの注解を含めているのである。そうした「独自の抄文」は講義の場における宣賢の独自説か、或いは『大学聴塵』とは別の手控に依拠した講述かについて、なお検討すべきところだと考えられる。

この疑問点の解明にあたって、手がかりとなるのは、前掲【表2】「大学抄の系統の分類」に見られる「清原宣賢マタハ後人講某聞書大学抄」系統の抄である。なぜなら、清原宣賢によって確立された『大学』の学説は、その子孫にも継承されていたと考えて良いからである。合計三十二本の伝本があるうち、本研究において、書写年代が

最も古い東洋文庫蔵梵舜書写『清家大学抄』を用いることとする。

そこで、梵舜書写『清家大学抄』をもって、改めて【例証一】から【例証三】までの聞書抄の抄文と照合してみよう。

## 【例証一】

### イ. 林宗和聞書抄『大学抄』十七ウ〜十八オ

1 致知トハ、ヲ<sup>チ</sup>尽<sup>ス</sup>ソ、2 格物ト云ハ辟ハ何ノ謂レニ由テ天ハ高ク地ハ卑イソト云ヲ究メ知ソ、3 我心ニアルカ知、万物ニアルカ物<sup>コト</sup>ソ、4 家ハ大夫、国ハ諸侯、天下ハ天子ソ、身ヲ脩ト云ヨリ以下ハ、天子ヨリ万民ニ及マテソ、5 致知格物ハ宋ノ儒者ハ参<sup>サシ</sup>シテ知タト云ソ、

### ニ. 梵舜書写『清家大学抄』二十四ウ

1 致知トハ、吾心ニ知ホトノ、智慧ヲ尽ス也、致知―格物トハ、天下ノ万事、万物ノ上ニ、アル所ノ道理ヲツクス也、2 タトヘハ、天ハ高ク、地ハ卑シ、何故ニ、天ハ高ク、地ハ卑ソト、キワムヘシ、3 物ニ在テハ、理ト云、意ニ在テハ、知ト云、如此観、則万物ノ理ヲ能心得也、5 宋朝ノ儒者ハ、致知格物ヲ参シテ知也、4 齊家ハ、一家ヲ治也、大夫以上ヲ云、治国ハ、一国ヲ治也、諸侯ノ事也、平天下ハ、一天下ヲ治也、天子ノ事也、致治ヨリ、脩身マテハ、天子ヨリ、庶人ニ至マテ、貴賤ニワタリテ、成スヘキ也、

## 【例証二】

### イ. 林宗和聞書抄『大学抄』十オ

1 支ハ枝ト同、支流ト云ハエタナカレソ、餘裔ト云ハ衣ノスソ也、裔ハ衣裾<sup>イキ</sup>也トシタソ、2 小学ノ枝ナカレ衣ノスソ程ノコトソ、3 四方ノハテヲ四裔<sup>エ</sup>ト云程ニ、末ノ物ト云心ソ、4 支流ヲ集尺<sup>シウシヤク</sup>等ニハニ見タソ、5 大全ニハ四ニミタソ、支ハ枝、流ハ水ノナカレ、余ハ食ノ餘ワケソ、裔ハ

衣ノスソ也、

## 二、梵舜書『清家大学抄』十ウ

1 支流トハ、枝川也、大河ノ、ソハヨリ、水ノ別レテ流ヲ云、餘裔ハ、衣ノスソ也、2 小学ノ書ノ一二ト云心也、  
3 四裔ト云ハ、四方ノ、ハテ云、裔ハ、末ノ末ト云心也、5 大全ニ、支ハ枝、流ハ水流、餘ハ食餘、裔ハ衣ノ  
スソト、四ニ見也、常ニハ、二ニ見也、

### 【例証三】

## イ、林宗和聞書抄『大学抄』十二ウ

1 隆盛ハ君ノ徳ノタカウサカンナヲ云ソ、治教ハ政道ソ、休明ハ美明也、治ハ休教ハ明ノ方ソ、治ハ君ニカケ、  
教ハ師ノ方ソ、2 超<sup>チヤウ</sup>普<sup>フ</sup>カ半部倫吾ナントソ、明人ノ出タル当代チヤ程ニ誉タソ、隆盛ハ前ノ三代ニカケテ書タ  
ソ、目出度トキハ至賢カ出イテ叶ヌ物ソ、

## 二、梵舜書『清家大学抄』十五ウ

1 隆盛トハ、君ノ徳ノ、サカンナルヲ云、治教ハ、政道也、休ハ、美也、治ヘカクル也、明ハ、教ヘカクル也、  
君ノ治、師ノ教也、2 趙普以半部論語、佐太祖也、宋朝ホト名人ノ出ル事ハナキ也、又朱子カ、當代ナレハ、  
美モ君臣ノ義也、三代之隆、古昔盛時、治隆於上ト云ヲ取テキテ、今モ、三代ニヲトラヌト云処ヲ見セテ、隆  
盛ト云、五代ノ季ハ、晦盲否塞ナシカ、今ハ治教休明ニナル也、

結果として、【例証一】では、「イ」林宗和聞書抄の五部分は「二」『清家大学抄』と対応でき、【例証二】では、「イ」聞書抄五部分のうち、四部分が「二」『清家大学抄』の抄文に共通し、【例証三】では、二部分に分けた聞書抄の内容も同様に、「二」『清家大学抄』に共通するのである。これは即ち、宗和抄に「独自の抄文」と推定される注解が、

『清家大学抄』にも含まれているのである。

以上は、僅か三つの例を挙げてみたが、実際に梵舜書写『清家大学抄』と林宗和聞書抄『大学抄』を全般的に対照した結果、二抄の一致度は七割近くあると認められる。従って、『大学聴塵』より『清家大学抄』系統の祖本が、宣賢が講義の際に用いられた手控である可能性が高いと言っても良からう。

なお『清家大学抄』の性質に関して特筆すべきは、『大学聴塵』とは対照的に、その中には『四書童子訓』の説が含まれていないことである。そこで、林宗和による校合の事情と関連して考えると、聞書抄に見られる『四書童子訓』が明記された箇所は、少なくとも『大学聴塵』によった注解ではないと考えられ、『四書童子訓』は、宣賢が実際の講義の際に参考されたのではないかと推測される。言い換えれば、宣賢は別の手控を祖述しながら、『四書童子訓』をも参考にした形で『大学』の講義を行ったのだと思われる。

このような講述方式で行われた宣賢の『大学』講義を林宗和が聞書し、さらに校合の過程を経て、現存している様相の聞書抄として成立させたが、その過程に潜まっている校合の諸相を、次の第四節において探っていききたい。

#### 四、林宗和による校合の実態

先行研究において、林宗和聞書抄『大学抄』には『童子訓』『輯釈』『詳説』とある参考注釈書が明記された箇所のあることは言及されたが、詳しい様相は明らかにされていない。発表者がそれぞれの散見する箇所をまとめると、『四書童子訓』は八箇所、『四書輯釈』は二箇所、『四書詳説』は五箇所見られる、という結果になっている。以下、順次に考察していきたい。



#### 四一 『童子訓』に関わる校合

聞書抄において、『四書童子訓』の書名が八箇所記されているが、大凡「童子訓云」「訓云」のような形で現れている。抄文のほうでは、口語体で記録され、また内容自体が語彙の解釈に関わるものが殆どである。例えば次の例である。

##### イ・林宗和聞書『大学抄』十九ウ<sup>②</sup>

訓云、此注ニ天理極ト云ト、事理当然ノ極トハイサ、カ別也、天理極ハ万物カ一太極ト云心ソ、事理当然ノ極ト云ハ、物々各具ニ太極一ト云心也、

##### ロ・『四書童子訓』三十三丁表

コノ注ニ、天理之極ト云ハ、事理当然之極ト云トハイサ、カ賛レリ。天理ノ極ハ万物一太極ト云心、事理当然之極ハ物々各具一太極ト云心ナリ。

##### ハ・『四書輯釈』

呉氏曰止至善（中略）然既言事理当然之極、又言天理之極者、蓋自散在事物者而言則曰事理、是理之万殊処、一物各具一太極也。

まず「イ」聞書抄の抄文を左の「ロ」『四書童子訓』と照合すると、かなり一致度の高さが認められることから、宗和自身が『四書童子訓』の学説を取り入れた可能性もあろう。ところが、この注解は『四書童子訓』独自のものではなく、中国側注釈書の「ハ」『四書輯釈』に含まれた呉氏の説を踏まえた解釈である。

ここで想起されるのは、天文六年本『大学抄』の奥書によると、宗和自身も『四書輯釈』を校合の際に使用したことである。すると、宗和はある程度『四書輯釈』の解釈を熟知しており、このような『四書童子訓』が『四書輯釈』の解釈を採用したところに関しては、本来の典拠から内容を引用するほうが自然であろう。従って、ここは宣賢が

『四書童子訓』を参考し講述したものを、宗和が筆録したのだと捉えても良いかと思われる。実際に、抄文は口語体の形を取っているのも、それが宣賢の講述であることを提示しているように考えられる。

この例のほかにも、「訓云」と記された箇所を宣賢の講述だと判断できる例があり、宣賢は講義の場において、確かに『四書童子訓』を参考にしたことが分かる。宗和は恐らく、このような内容に対して校合を行ったのだろう。一方、聞書抄の抄文に『童子訓』と明記されていなくても、それが宗和による校合の過程において補入された内容だと確認できるものはないだろうか。次の例のように、聞書抄には『童子訓』と全く同文の抄文が見出せる。

#### イ. 林宗和聞書抄『大学抄』二十四ウ

至於用力一用レ力トハ一物くノ上ニ其理ヲ究ルヲ云、万物各一太極ト云心也、一旦豁然トシテ貫通スト云ハ、此物ト彼物ト理ニ於テ全ク一也、喩ハ水ヲアマタノ器ニ盛テ置カ如シ、水ハ理ニ喩ウ、器ハ万物ニ喩フ、器ハ替レトモ水ハ一ツノ水也、万物ノ只一理ナルコトモ如レ此也、万物一太極ト云是也、

#### ロ. 『四書童子訓』四十五ウ

用力コトク久ハ、一物一物ノ上ニ其理ヲキハムルヲ云。万物各具一太極ト云心ナリ、一旦豁然トシテ貫通スト云ハ、此物ノ理ト彼物ノ理ト、全ク一ナリ、タトヘハ、水ヲアマタノ器ニ盛オクカコトシ。水ハ理ニタトウ。器ハ物ニタトフ。器ハカハレリト云ヘトモ水ハオナシモノ也。万物ノタ、一理ナルコトモカクノコトシ。則万物一太極ト云心ナリ。

ここは僅かな一端を例証したが、このような『大学聴塵』にも採用されることなく、一方で聞書抄に見える『童子訓』の同一抄文は十箇所以上確認できる。宗和は宣賢同様に『四書童子訓』を尊崇し、校合の過程において、そこから有意義な注解内容を原抄に取り入れたのではないだろうか。

## 四―二『四書輯釈』に関わる校合

聞書抄において、『四書輯釈』が明記されたのは二箇所見られる。次の例を見てみよう。大学章句「所謂脩身、在正其心者、身有所忿懣則不得其正」に対する注解の部分である。

### イ、林宗和聞書抄『大学抄』二十六ウ

身有<sub>一</sub>身ハ誤タ心ニナセト程氏カシタソ、輯尺ニハ心ノ字ニナキタソ、

### ロ、『四書輯釈』

所謂脩身在正其心者心有所忿懣

ここは、経文に見る文字の異同に関わる解説である。『大学章句』に「身」とある箇所は、『四書輯釈』には「心」の字に作っている。口語体で記録されていることから、ここが宣賢の口頭講述であることは間違いないだろう。

『四書童子訓』の場合と同様に、参考注釈書の書名が記された場合、それは講者の提示した解釈の典故だと捉えて良いだろう。一方、宗和が『童子訓』の書名を明記せずに、その学説を抄録している傾向は、『四書輯釈』の場合でも同じだろうか。次の例を挙げてみたい。『大学章句』の経文「仁義礼智」に対する注解である。

### イ、林宗和聞書抄『大学抄』三ウ〜四オ

天ニ有テハ理ト云、人ニ受テ生ルル時ハ性ト云ソ、是天テハ元亨利貞ノ四徳ソ、人ニ有テハ仁義礼智ノ四徳ソ、雲峰ノ胡氏<sup>カ</sup>云、仁者心之徳愛之理、義者心之制事之宜、礼者天理之節文、人事之儀則、智者知之理心之別ト云々、

### ロ、『四書輯釈』

雲峯胡氏云、朱子四書釋仁曰心之徳愛之理、義曰心之制事之宜、禮曰天理之節文人事之儀則、皆兼體用。獨智

字未有明釋：

「イ」聞書抄の傍線部に注目すると、「雲峰ノ胡氏カ云」から始まる漢文の抄出が見られる。右の「ロ」『四書輯釈』と対照すれば容易に分かるように、書名こそ明記されていないが、内容は『四書輯釈』所引の雲峯胡氏の説と同様である。やはり『四書童子訓』に関わる校合のあり方と同じく、書名を記さないで、内容を採用しているのである。

#### 四一三 『四書詳説』に関わる校合

最後に、『詳説』による校合の様相について検討していきたい。『四書詳説』は『大学聴塵』には『四書童子訓』にも含まれず、宗和抄に特有の参考注釈書として、阿部氏によってその受容のあることが提示された。しかし元来の諸先学において、所在が知られていないこの注釈書は、発表者の調べたところでは、現在は中国国家図書館に所蔵されていることが分かった<sup>③</sup>。以下、中国国家図書館蔵本をもって、宗和の『四書詳説』に関わる校合の実態を見ていきたい。

##### イ. 林宗和聞書抄『大学抄』ハオ

上ノ洒掃等ノ三二ハ、節（セツ）ト云、下ノ礼楽等ノ六二ハ文（フシ）ト云ソ、詳説ニハ節ハスコシキニ文ハ大也ト云タソ、マツ小ヲ云テ、后ニ大ヲ云タトシタソ、

##### ロ. 『四書詳説』

然洒掃應對進退、則曰節。禮樂射御書、則曰文。節小而文大、其序則亦先其小者、而後其大者也。

この例は上にある校合のあり方同様に、「イ」聞書抄にみる口語体の抄文は「ロ」『四書詳説』の本文と一致することから、宣賢の口頭講述だと認められる。また、次に挙げる例から、宗和による抄録の内容が存在していることが

看取される。

イ. 林宗和聞書抄『大学抄』三十一オ

此謂一上ノ文ヲ結シタソ、此<sup>ニ</sup>三引レ詩<sup>ヲ</sup><sup>ニ</sup>モ亦有序、首言<sup>ニ</sup>家人<sup>一</sup>、次言<sup>ニ</sup>兄弟<sup>一</sup>、終<sup>（ヲ）</sup><sup>ニ</sup>言<sup>（イフ）</sup><sup>ニ</sup>四国<sup>ヲ</sup><sup>一</sup>、亦刑<sup>（ノツトル）</sup><sup>ニ</sup>於寡妻<sup>（セイ）</sup><sup>ニ</sup>、至<sup>ニ</sup>於兄弟<sup>ニ</sup>、以御<sup>ス</sup><sup>ニ</sup>于家邦<sup>ニ</sup>之意也、

ロ. 『四書詳説』

此三引詩亦有序焉。何也。首言家人、次言兄弟、終言四國。亦刑於寡妻、至於兄弟、以御于家邦之意也。

以上、宗和による校合の様相について検証してきた。宗和は聞書抄を作成する際、講師が使用した三つの参考注釈書を自分でも参考にし、講義の場で筆記した宣賢の講述を校合し整合したほかにも、必要な注釈内容を抄録したのではないだろうか。

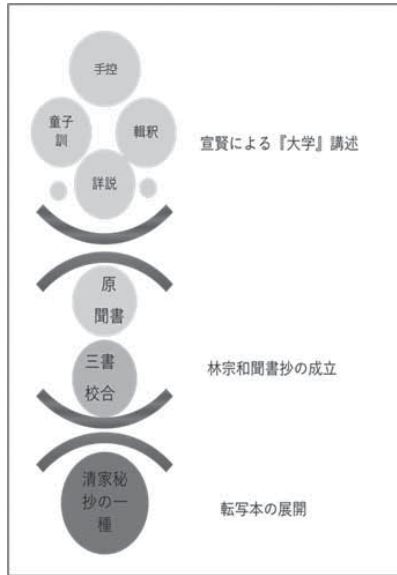
## 五、校合の意義

さて、こうした林宗和によった校合という学問行為は、どのような機能と意味を持っているのだろうか。この問題に対して、正面から窺うべき資料は乏しい。ただかの東京大学文学部国語研究室蔵『大学抄』伝本の奥書に、次のような識語が見られる。

右抄清原累代深蔵秘説也不可有外見者也 主三慶

この奥書は、林宗和が作成した清原宣賢『大学』講義の聞書抄は、すでに清家歴代の秘説に加えられたことを物語っ

ているように思われる。宗和の校合がもつ意義を、次の図に示しているように、抄物の本来の機能に添えて宗和の校合行為を考えれば、「校合」という学問的営みは、講者の講述に対して、その内容を意図的に改変するのではなく、聞書抄というものを講者の学説を反映できるものにするための調整作業ともなっており、同時に後世へと流布できるための土台作りともなっている、と言えるのではないかと考えている。



林宗和による校合の意義

最後になるが、発表者自身が思っている抄物研究への展望を述べ、本日の発表の括りとしたと思う。

本研究は、林宗和の校合を例に、中世の儒学学問の一端を明らかにした。このように、学問の担い手としての抄物作成者が講義の内容をいかに筆録し、校合し、またそれがいかに変容され、継続されたかという抄物生成・伝承の経路は、知の往来システムとしても理解される。それは実に、流動的なものであると考えられる。

遺された貴重な抄物資料を道しるべに、その継続・展開・変容などの全体像を明らかにすることで、従来の儒学者を中心とした日本儒学史論の枠組みや発想を捉えなおし、日本儒学史の新たな地平を切り拓くことにもなろうと思われる。

#### 引用文献

- ・一条兼良『四書童子訓』住吉朋彦『「四書童子訓」翻印並に解題』（『日本漢学研究』三、二〇〇一年）
- ・清原宣賢『大学聴塵』四書註釈書研究会編著『大学聴塵』（汲古書院、二〇一一年）
- ・曹端『四書詳説』中国国家図書館特蔵善本（A01153）
- ・倪士毅『四書輯釈』内閣文庫デジタル画像（昌平坂学問所旧蔵、文化九年刊）
- ・梵舜書写『清家大学抄写』東洋文庫蔵本（三―C―23）
- ・林宗和聞書抄『大学抄』京都大学附属図書館清家文庫蔵本（清家文庫デジタルコレクションより閲覧）、東京大学文学部国語研究室蔵本（11b51）

#### 【注】

- 1 京大本・東大本『大学抄』の書誌情報と解題は阿部隆一④番論考の五七頁に参照されたい。
- 2 京大本の当該部分に、一行ほど内容の欠落があったと判断されるため、ここは東大本により抄文を引用する。
- 3 明曹端撰。明刻本無刊記。十四卷からなる有欠本である。十二冊。うち『大学』一卷一冊。

#### 【謝辞】

資料閲覧及び利用に関してご協力いただいた京都大学附属図書館清家文庫・東京大学文学部国語研究室・東京大学史料編纂所・東洋文庫・中国国家図書館に心より感謝申し上げます。

#### \* 討論要旨

小野泰央氏は、先行する諸注釈を踏襲しつつ、足りないところを補うといった本文の成り立ちは集部の抄物にも共通することから、経部の抄物である

林宗和聞書抄の意義を示すためには、林宗和が新たに付け加えた部分に着目したうえで、集部の抄物との伝承のあり方の違いを明らかにする必要があるのではないかと指摘した。発表者は、林宗和聞書抄のなかに林宗和自身が自分の考えを述べたことが明らかに分かるような記述が見当たらないことや、宣賢より前の世代の抄物が清原家には遺されていないことから、宣賢以前の時代の抄物との照合は難しい、としながらも、今後は集部の抄物との共通点や相違点も視野に入れて検討していきたい、と述べた。

司会の海野圭介氏は、林宗和聞書抄が『大学聴塵』より「清原宣賢マタハ後人講某聞書大学抄」の諸本に一致する記述が多いという事実が何を意味するのかと質問した。発表者は、宣賢が講義の際に『大学聴塵』とは別の手控えを参照していた可能性が高まったものの、その流れを汲んでいると見られる伝本には『四書童子訓』に関する記述が一切見られないことから、宣賢は『四書童子訓』も合わせて参照しながら講義を行い、さらに林宗和が宣賢の話した内容を記録したと考えられる、と回答した。

海野氏はまた、『四書輯釈』や『四書詳説』といった新しい学説が、その後の清家の学問に与えた影響について質問した。発表者は、中国側の注釈書である『四書詳説』は長らく現存しないとされてきたが、今回の調査の結果、中国国家図書館に遺されていることが明らかになった、と述べた。また、『四書輯釈』は室町時代の有名な注釈書であるが、これらの二書が『大学』の受容に与えた影響については従来ほとんど研究がなされていないため、今後検討する予定である、と回答した。